



NO.422

R4年10月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

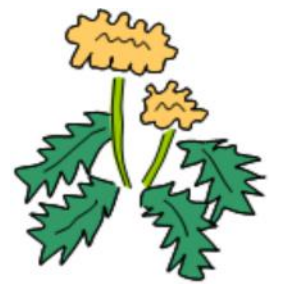
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「意思決定支援の捉え方…」

施設長 木下 昭一

私事ですが、幼少期から高校卒業までを田舎の大人数の家族の中で過ごしていました。両親が農業や養蚕を生業とする生活をしており、早朝から夜暗くなるまで働いていた記憶があります。その分祖母に色々な世話をしてもらっていたこともあり、いわゆる「おばあちゃん子」でした。その祖母が加齢と共に体調に変化を来すようになりました。今のように老健施設等がいくつもある時代でもなく、また祖母に特に大きな疾病等もなかったため、母親が自宅で今で言う「看取り」をしていました。子供の頃は、それが当たり前だと思っ

て理由の解らない私は「食べさせてあげれば良いのに…」と子供ながらに思っていました。私の中では、その事が祖母を思い出すたびに頭のどこかに引っ掛かったように残っていました。大人になると、あの時の主治医は「食べる事で、誤嚥性の肺炎等を起こし、命を落とす危険」がある為、あの時OKを出さなかったのだろうと理解出来ませんが、看取る側からすると「食べさせてあげられなかった」後悔の念が残るのも経験上事実です。不適切な発言かも知れませんが、「どちらにしろあと数日の命であるならば、好きな物を食べさせて見送ってあげたい」と。

先日、あるオンライン研修で、講師の先生に「意思決定支援」についてのご講演を頂きました。色々な多角的な方面からのお話があり、その中で挙げられた事例に、私の祖母と同じような事が利用者さんにあつたとの報告がありました。その施設では、簡単に言いつつ「食べさせたい」支援員VS「食べさせることで生じる危険性を心配する」看護師・栄養士の図式で対立する職員間のバトルが起こり、話し合いに話し合いを重ね、それでも結局結論は出ず、管理者に最終判断が委ねられ、ご家族とも相談の上、「食べさせる」結論に至った、とのことでした。この結論については「賛否両論ある」と思います。「最期は好きなものを…」、いやいや「命の存続が優先」等、それぞれの職員の置かれた立場によって、考え方や発言が異なることは容易に想像が出来ます。肝心なことは、その利用者さんの「最善の利益」の為に、関わる周りの支援者がどれだけ真剣に、可能な限りの時間をかけて本音をぶつけ合う話しが出来たのかに因ると思います。そのプロセスを経て出された結論に意義があるし、究極論かも知れませんが、利用者さんの「食べたい」という「意思は尊

重された」ということでは、例えば命を賭し削ってまでも叶えられたことに意味があると思います。しかし、一方では「食べさせる」ことで死が早まる可能性があれば、「食べさせる」判断をする側に「人の命の長さを決める権利があるのか」といった論議が必要のようにも思います。今回のような事例での「意思決定支援」は、ある意味特異な、究極のものなのかもしれません。日常の生活の中では、今回の意思決定支援のように「重み」のあるものばかりではなく、「安易に判断しているもの」もあるでしょう。しかし利用者さん側からすると、その1つ1つの表した意思に「重い」も「軽い」もの區別なく、崇高な意識を持って支援出来ているか否かで、支援員としての評価・価値に繋がるように思います。余談ですが、講師の先生の施設では、この件を通して職員間の絆、団結力がより深まった、と話されました。最後はあり来たりな結論ですが、利用者さんを第一に考え、職員同士が何でも言い合える、話し合える関係性を日頃から構築しておく事が、より良い「意思決定支援」をする為には必要であると思います。



1班 「久しぶりの帰宅」

この数年、新型コロナの流行で自粛生活が続いています。世間での流行度合いに応じて規制の強化・緩和をしていますが、常に油断は出来ない状況です。そんな中、三気の里でも8月にクラスターが発生してしまい、日課が大きく変わりました。利用者の皆さんは隔離生活となり、作業が出来ない毎日となっていました。私は施設外での勤務となり、施設内の詳しい状況が分かりませんでした。職員が休む時間も無く働いていたと聞き、改めて協力する大切さを実感しました。また、重症化した方もおられなかったことが不幸中の幸いでした。保護者の方にも、多大なご心配をお掛けしました。

このような中で実施された9月の帰宅を、利用者の皆さんはいつも以上に楽しみにされていました。担当のAさんにも帰宅する事を伝えると、笑顔が見られていました。久しぶりの帰宅だったので、何度も帰宅の確認をされていました。帰宅時も楽しく、そしてリフレッシュできたとのことで、本当に帰宅ができて良かったと感じました。

支援員 松出 晴香



2班 「寄り添う事とは」

施設内でのコロナ発生後、約3週間の療養期間を経て、グラウンド内で軽い散歩を行い体力の回復を図ったり、通常の作業量からは半減させながらも作業を再開することが出来ました。久々の作業初日は、机に顔を伏せて眠られる方がほとんどでした。その日は作業棟でゆっくり過ごし、次の日から徐々に作業に戻って行きました。

療養期間を振り返ると、ほとんどの方は自室で過ごされていましたが、BさんとCさんは罹患直後、自室で身体を休めることが出来ず、廊下に出たり部屋に入ったりを繰り返されていました。表情が険しかったので、しばらく寄り添い、作業はせずに部屋で過ごすことを説明すると、少しばかり表情が和らぎ、その後は支援員の傍で落ち着いて過ごされていました。症状は人それぞれ違うけれど、調子が悪いと誰もが不安な気持ちになります。気持ちに寄り添う事が大切だと思います。その後、皆さんは徐々に回復されて、無事に療養期間を終えることが出来ました。引き続き、感染症対策を徹底し、皆さんと共にコロナ禍を乗り越えていきたいと思ひます。

支援員 中村 愛





3班 「目から鱗」

入社して約半年が経過し、前職が高齢者福祉の私にとって毎日が新しい発見と難しさを感じながら支援に携わらせていただいています。そんな半年間の中で担当のDさんが「ベルト壊れた」と何度も訴えがある時期がありました。しかしベルトは壊れておらず「壊れていませんよ」と伝えても訴えは続きました。ある日、先輩支援員に相談すると「腹囲が変化していつもの穴に通らないのかもしれない」と言われ、言葉を額面通りにしか受け取らず表面しか見ていなかった私にとって目から鱗が落ちる考え方でした。その後、解決せずに訴えが無くなってしまったので理由は分かりませんでしたが、本人なりの訴えに対して疑問に思わなかったこと、理解できなかったことに申し訳ない気持ちで一杯になりました。

人にとって理解者がいることはとても大きなことだと思います。安心して生活していただくためにも、利用者さん達にとって良き理解者になれるよう努めていきたいです。

支援員 田淵 晃一



4班 「おもひでどしどし」

施設のコロナ感染症収束後のある日、4班にとっては待ちに待った班レクレーションが催されました。レクレーションとなっていますが、このご時世なので、施設外に出て楽しむという事は出来ず、園内で皆さんが楽しめるようにと企画し、実施されました。午前中は作業棟にて映画鑑賞。スクリーンに見入る利用者の皆さん。特にEさんは最前列で映画の世界観に入り込んでいます。昼食はテイクアウトのチャンポンと餃子。いつも時間をかけて食事をされるFさんも、この日は誰よりも早く食べ終わられていました。午後からは阿蘇までドライブ。道中お芋の洋菓子を買い、準備万端。目的地まで我慢出来ずにつまみ食いされる方、阿蘇の雄大な景色を観てお喋りを楽しむ方、車内は笑顔で一杯でした。

8月は楽しい思い出、きつい思い出と多くの思い出が出来た1ヶ月でした。次の思い出はどんな思い出か…どんな思い出にしろ、これからも元気に過ごしていきたい!! そんな4班の皆さんです。

支援員 荒川百合子



5班 「世界に一つだけのTシャツ」

8月31日にレクリエーションを行いました。まだまだコロナ対策で外に出かけることが難しい中だったので、室内で利用者が楽しめることを考えて今回はTシャツ作りに挑戦しました。好きな文字や記号に切り抜いた型紙の上からインクを塗るスタンプ式のものと、藍染の要領でTシャツをゴムで縛って様々な色のアクリル絵の具を上からかけていく絞りタイプのものに挑戦しました。スタンプはスタッフがスポンジなど色々な材料を駆使して作成したかいがあって、利用者の方も型選びから、色やスタンプ押しまですることができ、世界に一つだけのTシャツが出来ました！絞りも何色かの絵の具を使い個性あふれる色とりどりのTシャツができました！最後に洗濯をして作業棟に干していたのですが、カラフルなTシャツが並び「Tシャツ屋さんみたい」と皆で笑いながら眺めることができました。体験を通して、スタッフと利用者の方が一緒に楽しめるレクリエーションになってよかったなと思います！

副主任 石原 佳奈



療育雑記

「伝えること」

主任 石丸 直美

とにかく病気になること、病気になることを恐れるAさんは、倦怠感、寒気、食欲不振等ありますが、もっとも目で確認できわかりやすいという点で、熱があることを嫌い、毎回検温の度に緊張感をもって検温に臨みます。間違つても熱37度以上病気とならないように、風通しの良い場所に移動し、上着を1枚脱ぐことや、首元を大きく開いて脇と体に風を通すことをしてから検温をしてきました。

37度以上であると、その時点からほぼパニック状態です。慌てだし、泣きだし、室温を下げてと声をあげ、水を何杯も飲み、体温が37度を下回るまで、検温を続け、熱が下がらないことで取り乱します。一時的な火照りであることも多いのですが、実際に体調が悪い時は、言い聞かせを繰り返して、安静を保ち、治療を受けてもらってきました。回

復するまで、1日に何度も何度も何度も検温をし、37度を下回らないことに、不安を重ね、体調と共に情緒面でも崩れるのです。

そんなAさんですが、コロナの4回目のワクチンを接種した夜、これまでワクチン接種で発熱症状はなかったのですが、体温が37度以上でした。体温計を自分で確認をした際に、表情が固まりました。しかしスタッフが入りに、「ワクチンが身体の中に入り、今現在Aさんの身体の中でコロナに負けない体にするために、頑張って抗体を作っているからこそその熱です。Aさんも普段以上に頑張って運動や働いた時は身体が温まるでしょう、火照るでしょう。それと同じで病気ではありません。」とたった一度だけ話をしました。するとAさんは、「Aの身体が頑張っているんでしょうか？病気がない。」と口にされ落ち着き払ってしまいました。

付き合いの長い私は、取り乱さないことにビックリしました。今までも一時的な火照りで体温が上がっているような状況の際

に、「走ったから〜」「外が30度を超える暑さだから〜」等と同じように説明をしてきたつもりですが、その都度取り乱していました。今回取り乱さなかった理由は、今までの経験でこの熱は一時的なものではない（すぐに）体温は下がるため心配はないと思えるようになったからでしょう。今までも何度も入院治療を必要とする病気を経験し、8月にはコロナウイルス感染症も経験したことで、病気に対してどうしようもない不安を持たずに済むようになったからでしょうか。はっきりとはわかりませんが、思いをもって、理論的に説明をしていくことは重要なのではないのでしょうか。障がいの程度に関係なく、説明努力は惜しまないでいたいと思います。

環境美化

「夢の国を見習って…」

支援員 久米 善久

一般的に環境美化というと、ごみを拾う事、掃除をする事、草取りをする事、書類やファイル、机の上や中を整理・整頓する事等、身の回りや建物全体を美しく保つことを言います。以前読んだ本で、「夢の国ディズニーランドが愛される理由」という内容がありました。何故ディズニーランドが皆に愛されるのか。これは、やはりディズニーランドがきれいに掃除されているからと言われています。掃除スタッフが担当エリアを15分毎に回り、綺麗な空間を作り出しており、スローガンは「赤ちゃんがハイハイできるくらい、キレイにする！」だそうです。

一流と呼ばれる施設、建物は掃除も一流だという事かもしれませんが、三気の里においても、夢の国に見習い、皆で協力し、利用者の方が快適に生活できる空間を提供できるよう、環境美化に努めていきたいと思えます。



課長便り

「分離と連携」

事業課長 平川 聖子

8月の入所施設における新型コロナウイルスのクラスターを受けて、グループホーム、アンパ、BETREEの3事業所は、入所施設との行き来をしないようにして感染防止策をとりました。BETREEは地域から来られる利用者さんを受け入れながら、グループホームからの利用者さんには在宅支援。アンパは3日間の休業を決めて、その間はグループホームの日中支援。また、生活介護から5班のスタッフを中心に6名のスタッフがグループホームの日中支援と、入所施設では対応困難な事務作業や電話連絡をおこなって、制限された日常からさらに制限された利用者さんたちの生活を支えました。グループホームから生活介護を利用している9名の利用者さんは、5班の受注作業の継続依頼があり、グループホーム内で作業を続けることができました。普段と異なる環境下でしたが、室内でできる運動やお金の支払いの練習など新たな取り組みや課題提供も生み出されたことで、狭い空間での生活と

なっても退屈な顔をする利用者さんは一人もいませんでした。コロナに感染した方への直接の対応、さらにコロナ感染を広げないための対応、出来る限りの日常を保つための対応と、それぞれの持ち場で力を出し合い連携を感じた日々でした。



日々あらた

「栄養が行き届きますように」

世話人 寺田 ひろみ

グループホーム新あらたの皆さんの夕食を作らせていただくようになり4年。毎日、三気の里の厨房に人数分の食材を受け取りに行き、栄養士さんと一つ一つの食材の量や特別食の確認をしたり、時々新しいメニューの作り方を教わります。

食材は、いろいろな肉、魚をはじめ、驚くほど野菜がたっぷり、我が家の野菜はその量には追いつけない程です。食材の一人分の量や調味料、調理の仕方や新メニューの挑戦。私は毎日、楽しく勉強させていただ



ていると思う、自分の為にも本当にありがたく思っています。コロナ静養の時期も乗り越え、先日、久しぶりに帰宅された利用者さんは、御家族の愛情たっぷりのご馳走で、少し体重も増えて帰って来られ、満足された表情でした。

「今日のおかずは何かかな？」と、カウンターからのぞき込まれる皆さんの期待に答えられるよう、御家族の愛情に追いつけるよう、たっぷりの愛情と栄養で「美味しいです！」と言ってももらえる食事で、これからも皆さんの心と身体作りの応援をさせていただきますと思っています。



10月スケジュール

8日(土) 運動会
 11日(火) 田中Dr.ケースカンファレンス
 苦情報告会
 12日(水)~14日(金)
 大津町健診
 14日(金) アンパの日、Be TREE休業
 19日(水) 誕生会
 20日(木) 囑託医来診

22日(土) 帰宅予定
 24日(月) わっふるステップアップ講座
 31日(月) 2班レクレーション

毎週月曜日訪問理容サービス
 毎週木曜日ローソン移動販売



bet:ee314

BE TREE
 <営業時間>8:00~18:00

GHはじめ

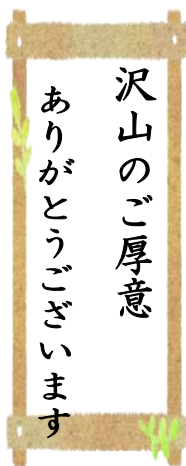
「謎」

支援員 藤本 優香

一(はじめ)では、曜日ごとに2名の利用者の方の寝具のシーツ交換を行っています。自分で出来る方には朝シーツを外してもらい、夕方自分でシーツをはめてもらっています。最初は起床時のシーツ外し後に洗濯に出すのも声掛けや介助が必要だったのでありますが、徐々に定着してきて自ら行動される方が多くなってきました。シーツをはめる際、「カバーの中に布団を入れる方法」で付き添って繰り返し支援し、一人でできるようになった方もおられます。

ある方は「裏返したカバーを布団の上に置き、紐を結んでカバーを表に返す方法」で着けられていました。グループホームではその方法で支援した事はなかったのですが、自宅でされている方法なのだろうと思っています。尋ねてみるとご家族はその

【寄付】
 三気の会家族会様
 満塩 武臣様 有馬 幸雄様
 千田 英文様 渡邊 京子様
 田中 満子様 渡邊 京子様
 櫻木 房江様 井手上 昌子様



方法ではなかったため、グループホームで教えられた方法なのだと思っていたとのことでお互いにビックリ。どこでその方法を知ったのかは謎のままですが、間違ったり戸惑ったりしたことは無いのでその方にとって分かりやすく、合っていたのだということは確かです。

このように利用者さん一人一人に合った方法を見つけていけたらと思えるエピソードでした。

【物品】
 清田 栄一様 中村 秀隆様
 櫻木 勇夫様 岡崎 範子様
 亀崎 幸久様 田中 満子様
 魚谷 秀文様 松井 尚武様
 中嶋 久枝様 渡邊 京子様
 松村 俊介様 宮本 眞一様
 渡邊 正司様 坂口 正浩様
 東坂 富士代様 金森 保様
 井手上 昌子様 佐々木 英征様

【後援会ありがとうございます】
 白井 桂子様 田中 基幹様
 宮本 茂様 森川 マサミ様

